■To Create Next Generation of Tanba&Tango

京都たんタンのローカル広報誌

発行日　２０１２年２月１日　Vol.１０

The Style-Feb2012

ＮＰＯ法人　京都丹波・丹後ネットワーク

―里山スタイル―

―Contents―

1.style
People in satoyama style
おもてなし交流会

2.style
もてなしの心を持つことは
ほっと Style

3.style
絆を取り戻すために

4.style
thers information
里山スタイルとは

People in Satoyama Style

岡部　一己さん
Kazumi Okabe

毎日世界で一番素敵な仕事「ギャルソン」を楽しむ。

◆プロフィール
京都府福知山市三和町出身。福知山高校卒。フランス料理店「オーグードゥジュールグループ代表を務め、現在東京に６店舗、博多に１店舗経営。
※当ＮＰＯ法人主催の「おもてなし交流会」で講演していただきます。

里山スタイル　第２章　「おもてなし交流会」の開催

・日　　時　平成２４年２月２６日（日）
・場　　所　三和荘（福知山市三和町寺尾権現４番地）
・入 場 料　無料（第１部のみ）
・共　　催　ＮＰＯ法人京都丹波・丹後ネットワーク
　　ＮＰＯ法人丹波・みわ、三和ライオンズクラブ

第１部　　１３：３０～１５：３０　　講演（おもてなしの心：岡部一己様）
第２部　　１６：００～１８：００　　岡部さんと「心のつながり」を楽しむ会
※会費（３０００円：バイキング制）２月１５日まで下記まで事前申し込み必要。（定員２０名）

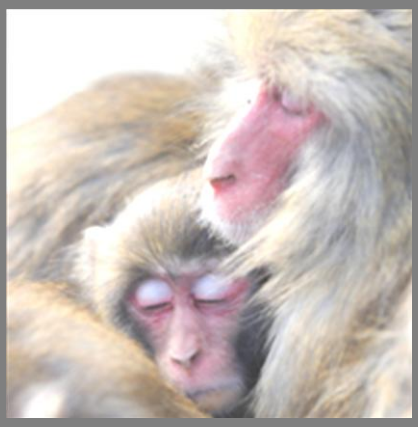
★お問い合わせ・申込み先：ＮＰＯ法人丹波・みわ　℡0773-58-3717
※詳細については当法人のＨＰをご覧ください。→http://www.kyoto-tantan.net/

交流会のチラシ

ほっと Style

ファインダーで地域の魅力再発見・発信！を目的に写真講座を開いています。その生徒さんが撮られた１枚！！

寒―い冬に心温まる写真ですね。地球上には様々な生態系がいます。互いに意思は通じ合えないかもしれないけど心は通えるかもしれない。だからこの写真を見てほっこり心に響くのかもしれない。



撮影者のニックネーム：ZERO さん

satoyama style　おもてなしの心を持つことは。

日本が誇る「もてなしの文化」の今

日本人は元来からおもてなしの文化をもっています。
千年以上の歴史があり、日本が世界に誇る文化でもあります。しかし、近年「もてなしの心」が忘れ去られているような気がします。自己利益や組織を優先する社会が相手の立場にたって考えるという思いやりの文化を忘れさせてしまったのではないでしょうか？
昔にあって、この時代にないもの・・・？
それは目には見えない、カタチでは分からないもの…だけど実はとても大切なものなのではないでしょうか？　私たちが１年半活動してきたなかで、「人が生きていくために必要な本質的な部分が忘れ去られている」、そんな現実を目の当たりにし、一抹の寂しささえも感じられました。

もてなしの心を持つことの意義

ＮＰＯや企業活動、イベントをするときでも「地域を活性化したい」、「会社を大きくしたい」、「成功させたい」という気持ちは携わっている人であれば誰しもが抱く思いでしょう。
多くの人が集い、活力に満ち溢れた社会にしていくことはどこの地域も大きな課題になっています。しかし、道徳の心を忘れてはいけません。家庭、職場、社会においても、人が人を大切にする心を持つことは、美しさ、温かさ、楽しさが感じられる「おもてなしの心」があるところであり、きっと人々の心の拠りどころとなるはずです。

おもてなしの心とは人を迎える際の人に対する「心遣い」、「態度」、「振る舞い」、「とりはからい」など心からの接待のことです。

少子高齢化、グローバル社会になってきた２１世紀の今だからこそ、従来のハード面だけでなく、ソフト面を考えることが重要になってきています。
人を温かく迎え、心温まる対応をする。そんな相手を思いやる気持ちを素直に表現するのがおもてなしです。
企業活動をする上でも従業員や製品サービスの付加価値として「おもてなしの心」を形成することは「物」と「お金」の関係ではなくて、人と人の「絆」が深まり、もてなす側ともてなされた側のつながりが継続されるのではないでしょうか。

こうした日本の素晴らしい「おもてなし文化」を「心」から見直すことでうまく地域が循環していくと思います。押し付ける考えではなく、相手にとって一番なにが最良かを考えることが必要です。
相手が求めているもの、やって欲しいことが分かります。そこから利益が生まれるはずです。
「利」は心から生まれます。目先のお金からは生まれません。

もてなしの心で毎日を楽しみながらレストラン経営をされている福知山市三和町出身の岡部一己さんに「おもてなしの心」をテーマに講演をしていただきます。
自分の住む町を知ることで誇りに思う気持ちが生まれます。ふるさとを想う気持ちは「おもてなしの心」の原点です。
社会の中でどのような生き方をして豊かな人間関係を築いていくか？地域づくりを進めるためにも「おもてなしの心」を実践することで自分自身の答えを見つけませんか？

※里山スタイル第２章「おもてなし交流会」の詳細については当法人のＨＰをご覧ください。→http://www.kyoto-tantan.net/

Fukuchiyama　Style

失われた絆を取り戻すために　～広小路商店街～

福知山は北近畿の商業の町として明治から昭和中期頃まで人が歩けなくなるほど賑わっていた時期がありました。近年は郊外型ストアーの出店、交通の利便性で京阪神へも気軽にショッピング出来るようになり、旧態依然とした商店街はシャッター通りと呼ばれるようになってきました。これまで商店街を中心とした活性化事業を市が中心にやってきましたが、残念ながら大きな成果にはつながっていません。「なぜ人が来なくなったのか」、「政策のやり方は間違っていなかったか」。このような論議がきちんとされなかったのではないか。取材する中で様々な要因が見えてきました。

広小路商店街の失われた３０年。

福知山は城下町として栄え、商業、交通の要所でもありました。広小路商店街は３００年の歴史を誇る古くからある商店街で、人々は何もしなくても自然に商店街に集り、商売は繁盛し、恵まれた土地でした。その恵まれた環境がお客さんの大切な時間を満足させるという「もてなす心」を養うことを忘れさせ、やがて最盛期を過ぎた昭和５０年代頃から便利性、効率性、即時性など時代の変化で客は次第に減っていきました。
この頃から互いに相手の店を宣伝することで商店街全体を繁盛させ、結果自分のところにも利益につながるという考えをなくし、商店同士の連携を欠いた取組みの結果、人が集まりにくい商店街に自らしてしまった経緯があります。
商店街の活性化にはこれまで数多くの支援の手が差し伸べられています。しかし、商店主の高齢化、後継ぎ問題、店を住居にしているなどのためになかなか活性化には至りませんでした。広小路でのイベントや行事でも積極的な客の呼び込みやイベントをバックアップするような動きが見られず、町なかの為に駐車場が少ないこと等もあり、行きにくい町になり、商店街が形だけのものとなった時代が今日まで続いているという現状があります。

春には春しか味わえないものを、秋には、秋の味わいを

「福知山はその昔交通の要所であり、自然に人が集まってきたこともあって、もてなしの文化が育たなかったのでは…」と広小路商店街の老舗カメラ屋で長く町を見てきた事務局長の吉田博さんが重い口調で答えられました。しかし一方で、福知山は歴史的に水害が多く、幾度となく商店街は互いに助け合い、行政にも頼らず復興してきた経緯があります。「もてなしの心」はなくても絆はあったのではないかと話されます。不器用で自分から先導に立って新しいことをしていく勇気はないけど、つながりを大事にする町だったのではないでしょうか。
ここ１年、福知山では市民参加型の活性化プロジェクトもスタートし、これまでにない、町おこしの兆しが見えてきています。絆を大切にしてきた吉田さんの周りには若い人が集まり、彼らが中心となってイベントの開催や資源の掘り起しをしています。今年の４月にはお城の下に飲食や雑貨のショッピングが楽しめる「ゆらのガーデン」がオープンし、広小路商店街ではシンボルであったアーケードの撤去が進められようとしています。
吉田さんは商店街を盛り上げようと２０年以上も各商店連盟を説得してきたといいます。アーケードの撤去はもう一度、商店街を再生する切り札として、城下町の風情を再現することで、落ち着き、安らぎ、和やか、穏やかな雰囲気を感じさせる、昭和初期のあの頃のような絆を大事にする町にする最後のチャンスだと奮闘しておられます。
「都会に出ていった世代が帰って来られるように」、「その世代が帰ってきたとき、幸せに暮らせるように」、そして「福知山に生まれた人間として自分の町を誇れる町にしてこの世を去りたい」、だから自分の店が赤字続きでも若い人が頑張ろうとしている今、地域活動に多くの時間を割いているのだと…。

「春には春しか味わえないものを、秋には、秋の味わいを。」
そこに住む人が自分の地域に関心がなければ地域外の人は魅力を感じません。郷土愛を持つことで誇りが生まれ、相手に伝えたい、言葉では言い表せない感動を味わって欲しいと思うはずです。そこに「おもてなしの心」が加わることで、さらにきずなが深まり、福知山が魅力あるまちになるのではないでしょうか。
たった１度しかない人生をその土地でしか感じることができない感性や言葉では言い表せない絆を心で感じとれるようなこの地域の“スタイル”が確立できる仕掛けづくりが出来ればと思っています。

ホームページはこちら→http://www.kyoto-tantan.net/

Others

Information

ホームページもご覧ください
記事以外にも様々な情報を掲載しています
http://www.kyoto-tantan.net/

◆ 賛助会員・寄付を募集しております。

賛助会員：（個人） １口：１０００円～
（団体） １口：１００００円～
寄付：１０００円～

賛助会員と寄付の申し込み方法はホームページをご覧ください
→http://www.kyoto-tantan.net/
またお電話でも受け付けています。→℡0773-45-3507（平日９時～17時）
みなさまのご支援、ご協力よろしくお願いします。

◆ 「里山スタイル」とは

ＮＰＯ法人京都丹波・丹後ネットワークがたんタン地域の里山を次なる未来へつなげるためのプロジェクトです。

今、里山の次代を受け継ぐ者、またその文化を知る者は乏しい状況です。高齢化、過疎化、伝統文化、伝統コミュニティの衰退から社会的な課題に直面しており、その解決方法に苦慮しています。

その中で里人ならではの暮らし方、生き方、価値観、そして自然を育む里人の「こだわりのスタイル」で里山の持続可能な環境へ、見出すべきときに来ています。

これまでの生き様やスタイルを変える必要はありません。大事なのは自分の住む地域の自然、歴史、伝統文化に関心を持ち、その長所を磨くことです。地域に愛着を持つことで誇りに思う気持ちが生まれます。

人を温かく迎え、心温まる応対をする。相手を思いやる気持ちを素直に表現するのが「おもてなし」です。
郷土愛は地域の魅力を伝えたいという気持ちにつながります。

美しい自然、資源、歴史、文化を「活かすために」、「伝えるために」、「守るために」、私たちは次なるムーブメントで地域の革新に繋げていきます。

私たち大人が子供たちの未来でもある里山の将来を考えてみませんか？

編集後記

２月は心をテーマにした取組みをします。２か月後には新年度を迎え、新しい出会いと事業が始まります。環境は自分を変えません。心からもう一度見つめ直すことでおのずと周りが変わっていくはずです。

発行元：ＮＰＯ法人　京都丹波・丹後ネットワーク
〒620-0052　福知山市昭和町７７　谷本ビル１Ｆ
ＴＥＬ&ＦＡＸ（０７７３）４５－３５０７
Ｅメール：tantan@kyoto-tantan.net
編者ペンネーム：mulepool

※お問い合わせの時間帯は平日９時～１７時までです。